



若年層における携帯コミュニケーションの一側面

著者	小野 望
雑誌名	筑紫女学園大学紀要
巻	17
ページ	1-17
発行年	2005-01-01
URL	http://id.nii.ac.jp/1219/00000902/

若年層における携帯コミュニケーションの一側面

小 野 望

An Aspect of Communications with Cellular Phones
among the Young Generation

Nozomi ONO

1. はじめに

「ケータイは安心のツールです。」

こう書くと広告文の一節のようだが、これが本稿の結論である。もちろん、そういう側面を持っているというに過ぎないが、これから扱おうとする若年層のコミュニケーションにとって、「安心」というのは重要なキーワードである。自らの未熟に対する漠然とした不安をどう克服するか。他者との円滑なコミュニケーションをとる前の段階に、彼らはのり越えなければならないハードルを抱えている。携帯電話という比較的新しい通信媒体の使用実態が、この問題に彼らがどう対処しようとしているのか、その結果どのようなコミュニケーションの姿を生じているのか、その一面を明らかにしてくれる。

以下次の観点から、携帯電話等に関する統計資料をもとに、特に若年層の使用実態を概観し、上記の問題に考察を加える。(以下、携帯電話及びPHSを「ケータイ」と呼ぶことにする。)

ケータイの概況

ケータイの相手

ケータイメールのコミュニケーション

2. ケータイの概況

2-1 新しいメディア

日本における携帯電話及び PHS の契約数は、2004年8月末段階で8,838万件である。これは人口比69%、世帯比179%にあたる⁽¹⁾。新しいメディアに若者が興味を示すことは容易に想像されるし、ケータイの使用状況はそれを裏付けている。今や、若者たちの中でケータイが重要なコミュニケーションツールとなっていることは、街を行く彼らの姿からもうかがい知ることができる。

新しい手段を手に入れると、私たちはそれを組み込んで、自分たちのコミュニケーション方法を工夫していく。「手段」「道具」というものは、それぞれが特徴なり、制約や限界を持っている。「工夫」という場合、普通は特長を活かすことだろうが、時には「制約や限界」を逆に利用することもする。

若者たちは、社会的な規制や仕事上の必要性に、さほど強く縛られない立場にある。それだけに、彼らが新たなメディアを使用する実態には、どのようなコミュニケーションの中に自らを位置付けたいのか、自らが他者とどう関わりたいのか、という心意が顕著に表れてくることがある。

2-2 使用率

ケータイの使用率に関しては種々の調査報告があるが、その数値にはかなりのばらつきがある。また、ここ2～3年の急速な増加で、性別・年齢などの階層による差は縮まってきた⁽²⁾。しかし、若年層、特に大学生世代を中心に普及がリードされてきたことは間違いない。

2001年調査⁽²⁾の段階で、15～34歳が80%を超えていた(表)。同年調査⁽³⁾によれば、特に大学生世代では男女とも90%を超えており、その割合は、卒業後の世代よりもやや高い(表)。22歳を境に男女の使用率がわずかながら逆転するのは、次項利用動機表 に見える「仕事上の必要性」が関係するのだろうが、それでも大学生世代に及ばない。これらの数値は、調査毎にデータの異なりがあることと合わせて考えれば有意差とは言えないかもしれないが、ケー

表 【使用率：全年齢層】

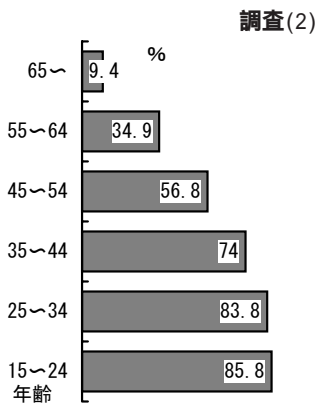
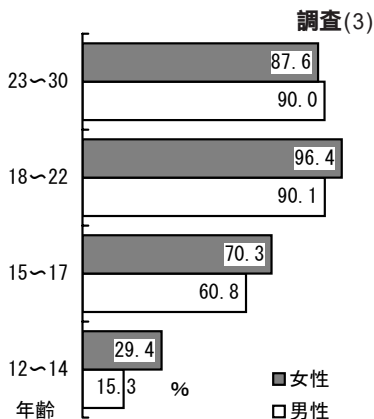


表 【使用率：若年層】



タイの使用が「仕事」のようなよりパブリックなものではなく、もっとパーソナルなコミュニケーションに支配されている可能性を示唆する。

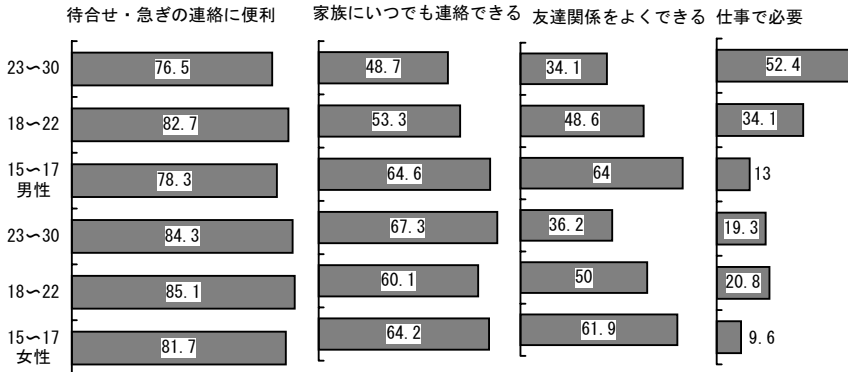
ケータイ時代の直前に、「仕事の連絡」のために提供されたポケベルが、恐らくサービス側の意図を越えて、女子高校生を中心とした若者達に独特なコミュニケーション機器として使用されることとなった（三宅2001）。ケータイは、それを受け継ぐ面を、確かに持っているのである。

2-3 利用動機

表 は、ケータイの利用動機として報告されたものである（調査(3)）。まずは機能上当然のことだろうが、「携帯」であることの利点として「待ち合わせ・急ぎの連絡に便利」が一位に挙がってくる。家族・友人の選択肢には、「誰と」「どのような」連絡をしたいのか、ということが予めセットされているものがあって、これで「動機」を量れるのかという疑問は残る⁽³⁾。だが、種々の統計で明らかにされているケータイの通信実態と合わせ考えると⁽⁴⁾、ここで上位に挙がっている「家族」「友人」という通信相手の二つのグループは、若年層の人間関係や生活パターンから言ってこれまた当然だという以上に、注目に値するものであると考えられる。

表 【利用動機】

調査(3)



種々統計からは、若年層のケータイ相手は「友人」が優位を占めている実態が浮かび上がる。そのコミュニケーション行動は「関係をよくすることができる」と言ってしまうまでもだが、ケータイの特性と彼等の望むコミュニケーションのあり方が互いに影響し合って、ケータイ以前にはなかった姿を造り上げているようだ⁽⁵⁾。

「家族」に関しては、相手としては友人より頻度が少ないにも関わらず、表では「友人」項目より高率となっている点が注目される。

以下、この二つのグループとのコミュニケーションにおいて、ケータイがどのような役割を負うことになったのか、それぞれについて考察を加える。

3. ケータイの相手

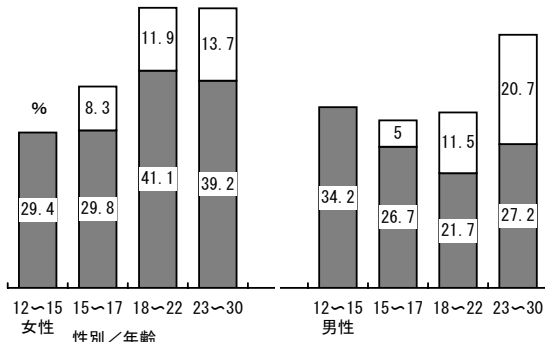
3-1 家族

調査(3)中「ケータイの利用と対人関係」(人との結びつき)に関する設問で、「家族が安心するようになった」という回答が3割前後見られる(表)。未成年の間は、ケータイを持つのに親権者の同意を必要とする。だからといって、この回答は、必ずしも許してもらったからというような受け止め方の現れではなく、ごく自然に家族間コミュニケーションの道具として活用している姿

と考えていいのだろう。
「家族に」と限ったものではないが、同じ設問の選択肢の中で⁽⁶⁾、「しばられていると感じる」割合が比較的少ないことから見ても、また、表「利用動機」の中で「家族にいつでも連絡できる」という回答が6割前後となることからしても、まさに「携帯」していることで、より気軽に連絡するように「なった」ということだろう。

表 【家族(1)】

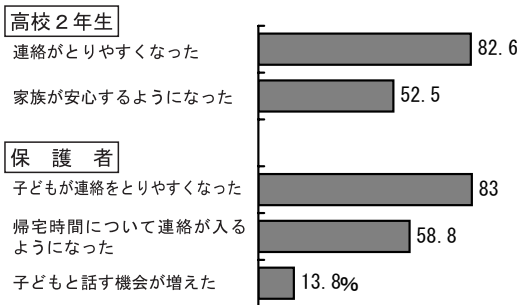
□しばられていると感じることがある 調査(3)
■家族が安心するようになった



高校2年生とその保護者に対する調査6(表)でも、子どもの側は上記と同様の(より高率の)回答をしており、保護者の側も連絡という面では改善したと答えている。もっとも、「子どもと話す機会が増えた」という回答は少なく、コミュニケーションの深化に役立っているというわけではない。

もともと、ケータイでのそれは、対面関係にないことを前提としているから、家族間のコミュニケーションとしては、「無いよりまし」程度のもంట言うべきかもしれない。しかしながら、家族間コミュニケーションの希薄化が進んでいると言われる現状では、一定の役割を果たしていると言うことができるのではないか。それは、多くの場合「帰宅連絡」⁽⁷⁾をする(容易にできる)ことで「家族が安心する」という単

表 【家族(2)】 調査(6)



純な構図に過ぎない。だが、これは、保護者の側からすれば「せめて連絡くらい」という要求が充たされるものであるし、子どもの側からすれば自らにも安心をもたらしてくれるものである。相手に、どういう形にもせよ受け容れられているという安心感は、その上に人間関係・コミュニケーションを築いて行くための重要な基盤である。「遅くなるよ」の一言が、大げさに言えば、すれ違いがちな家族の生活を繋ぐ一定の役目を担っているのかもしれないのだ。

3-2 家族間の挨拶

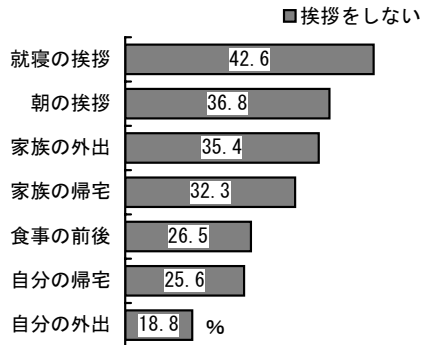
ケータイ使用と直接には関係しないが、家族間コミュニケーションの希薄化ということに関連して、家族の間での挨拶について考えてみたい。

例えば家族間で「おはよう」「いただきます」などの挨拶をするかどうか。伝統的な日本語社会では「儀礼」「社交」としての挨拶を家族間で交わす習慣はなかったが、家族のあり方が変化し家の中での「出会い」が生じるようになって新たな習慣が生まれた、といわれる⁽⁸⁾。筆者の場合、経験的には「する」ことを求められてきたし、子どもにもそうしつけてきた。現代の状況は、既に新たな習慣の中にあると考えてよいだろう。1999年に行った意識調査では、中・高校生とその親世代の両方で、9割前後が「するべきだ」と答えていた⁽⁹⁾。この新たな習慣は、伝統的な家族の姿からすると、家族間を「よそよそしくさせる」動きだったと言えなくもないが、むしろ近代的な「個」の概念や、その反映としての家の形態変化（個室の常態化などを典型とする）がもたらした実態としての「よそよそしさ」を、言語コミュニケーションによって和らげようとする動きと見るべきであろう。

ところが、2003年に高校生を対象に行った実態調査⁽¹⁰⁾では、「しない」割合が表の通りである。これは伝統的な「しない」感覚の現れなのではなく、上の流れの後の「挨拶すらできない」姿だ。「できない」というのには、そういう場面で家族と対面しない（「就寝」や「家族の外出・帰宅」の場合など）からできないという、家族の生活パターンの個別化によるものを多く含んでいるはずだ。「自分の外出」より「帰宅」の場合で「しない」割合が高いのは、送

り出す者は居ても迎える者は居ないことが多いという状況の表れだろう。全体の中では、「食事の前後」「自分の外出/帰宅」で「しない」割合が低いことが、「できる」状況では「する」という態度の方向を示している。「食事」は、相手が家族かどうかということを超えた別の習慣という側面もあるだろうが、他の場合に比べて家族と対面している場合が多いことも要因の一つだと思われる

表 【家族(3)】



対象：高校生 2003

し、「自分の行動(帰宅・外出)」についてはこれを告げる責任があるという感覚を持っているためだと考えられるからだ⁽¹¹⁾。そういう意味では、3-1で述べたケータイの「帰宅連絡」は、自分の行動に関するある種の挨拶的な要素(表現の形式化には至っていないだろうが)を持っていると考えることもできる。

このように、挨拶の現状だけを見ても、家族構成や家庭のあり方の変化は、家族間の対面性の減少をもたらし、コミュニケーションの変化を生んでいることが分かる。そうした中であって、ケータイという非対面性のコミュニケーションツールが、「連絡しやすい」「安心する」として支持されているのは、むしろ積極的に評価しようと言ってよい。

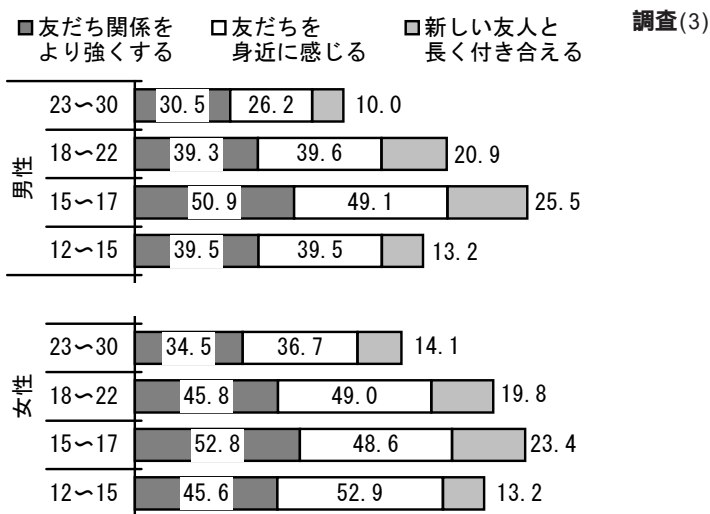
3-3 友人

表は、ケータイ使用による対人関係の変化(友人)をどう感じているか、男女別、年齢別に示したものである。複数回答の中で、「今までの友だち関係をより強くするのに役立っている」「友だちを身近に感じることができる」と評価する回答が上位に来ており、年齢が低いほどその割合は高い。また、高校生、次いで大学生世代において、「新しく知り合った人と付き合いを長く続けることができるようになった」という回答が多い点が注目される⁽¹²⁾。

対人関係の構築に未熟な若者にとっては、親しくない他者との対面状況は大きな緊張や不安を与えるものだ。これは現代に限らず、若者が常に抱える問題で、大方は大人のコミュニケーション方法に習熟するという形でその時代の言語社会に溶け込んでいくことになるのだろう。だが、こうしたストレスも要因の一つとなって、時に既成の枠に収まらない若者の側の動きが新しいコミュニケーションの姿を生むことがある。不断に進行している様々な変化の中で、今日若者たちの間に、二つの大きな動きが明確化してきている。一つは、コミュニケーションのパブリックな面における新たなマニュアル化の動きであり⁽¹³⁾、いま一つは、プライベートな面における少数の相手との濃密さを求める動きである⁽¹⁴⁾。

ケータイを使った「友人」とのコミュニケーションは、この二つ目の動きに対応するものだ。「携帯」であるゆえに、そうしようと思えば常時繋がっている（と感じる）ことができる。いつも一緒にいる（対面する）ことは、物理的にも不可能だし、可能だったとしても双方に大きな負担を与え、早晚離れたく

表 【友人】



なるだろう。だが、ケータイは「ながら接続」を可能にする。束縛されないわけではないが、その度合いをある程度自分で調整できる。まさに、非対面性という特徴の積極的な活用だ。そういう接続状況であればこそ、相手の人数は限定される。種々調査では、「よく話す／メールする」相手は5人程度までが大半を占める⁽¹⁵⁾。これには「帰宅連絡」を中心とする家族が含まれているはずだから、3～4人が友人ということになるだろう。

「親しくない他者」に限らず、友人関係にある者との間にも緊張や不安は生ずる。一旦得た友人を自らのコミュニケーション（の拙さ）で失ってしまうかもしれないという恐れの方が、むしろ彼らにとっては深刻かもしれない。この点についても、ケータイの持つ性格が彼等の不安を和らげ、コミュニケーションを円滑に進めるツールとして機能していることが推測される。その実態は、次項ケータイメールにおいて、より明らかに見ることができる。

4. ケータイメールのコミュニケーション

4-1 通話とメール

表は、通話とメールの使用頻度に関する調査結果である。いずれも1日5回未満を省略して示している。これによれば、少なくとも若年層においてケータイは、「電話」機器というよりは、「メール」機器として使用されていることが分かる。

ケータイにはもう一つ、WEBを介した情報機器としての機能がある。ケータイのサービス側も恐らく最も力を入れ、行政も日本型ユビキスタスと奨揚している部分である。若者達も様々な使い方をしているが、「ポケットに収まる国際化」などと喧伝される機能（実際にそれだけの機能は持っていない）との間のギャップには、なかなか興味深いものがある。しかし、情報の（やり）取りという点ではコミュニケーションの一部であるものの、双方向性という点で通話やメールと現状では大きく異なっているため、本稿では考察の対象としなかった。

4-2 メールの手相

表 は、ケータイ・PC それぞれの使用者に、よくメールする相手を複数回答で問うたものである⁽¹⁶⁾。調査対象がすべて20～21歳の女子大学生という偏りがあるが、そのほとんどが、よくメールするのは「よく会う友人」であると回答している。ケータイメールについては、調査(5)をはじめとする複数の調査で、同様の傾向が報告されている⁽¹⁷⁾。

よく会う友人の次には、「普段あまり会わない友人」が続く。これはむしろ「会えない」友人と言うべきかもしれない。会えないから別の手段を使ってコミュニケーションする。これは、形としては手紙 固定電話と展開してきた通信手段の延長線上にある。よく会う友人とのメールも、頻繁なラブレターのやり取りや親友との夜中の長電話と相通ずる部分を持っているだろう。だが異なる点も多い。ここに見られるのは、少数の(3-3)友人と、ほとんど毎日会った上に10回以上(表8)のメールを交わすという姿だ。一つの一つのメールは短いもので、交わされる情報量は(言葉にされる量は)少ない⁽¹⁸⁾から、濃密さという点では手紙や電話に及ばないはずだ。そこでは、

どのような友人関係が築かれているのだろうか。

4-3 ケータイメールの使用理由

他のメディアではなく、ケータイメールを使う理由は何か。

表 【使用頻度】

調査(3)

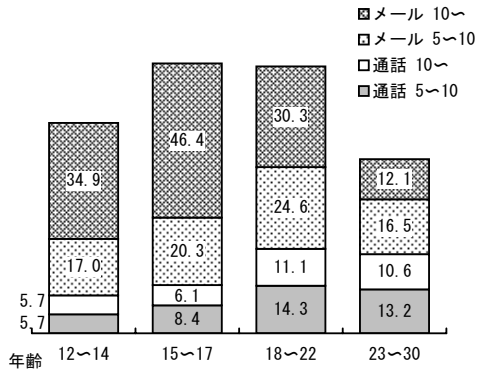
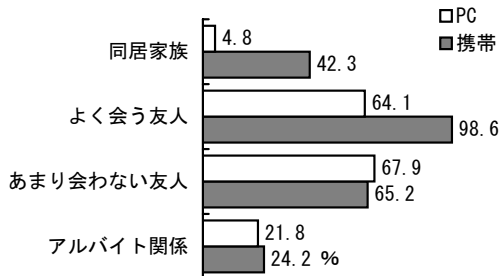


表 【メールの手相】



対象：女子大学生 2002-2003

表は、実際にメールするときに、どの理由が最も強いことが多いかを、上記と同じ対象に問うたものである。

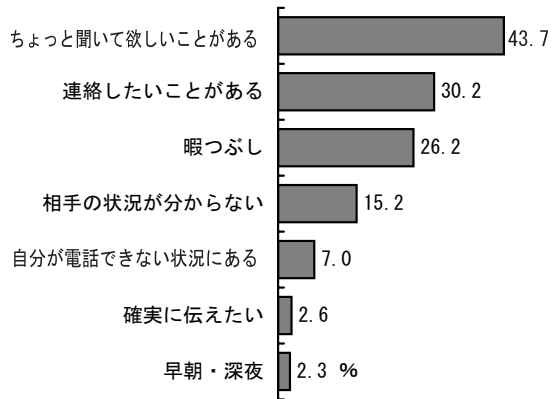
「連絡しなければならぬことがある」という通信機器としての役割は当然拳がってくるが、最高位ではない。また、「確実に伝えたい」という、文字情報としての特徴を活かす意図も、ほとんど見られない。

「相手の状況が分からない」「早朝・深夜」という選択肢は、相手に対する配慮＝電話をしないという配慮がメールを使う理由となっている。つまり、メールの非同期性を利用して、「あなたのペースに合わせます」という姿勢を表すものだ。

相手に対する配慮、と言うより「相手を煩わすことへの不安」は、特に若年層にとっては自らのコミュニケーション行動を規定する重要な要素であると推測される。この調査では、その認識は必ずしも顕在化しなかったものの、4-1の通話とメールの使用頻度の差自体が、メールの非同期性・非対面性への支持であることは明らかだ。

注目されるのは、「ちょっと聞いて欲しいことがある」「暇つぶし」という、メール内容にも関わってくる項目である。つまり、ケータイメールを介して「よく会う友人」と気軽に雑談を交わしているということになるわけだ。この様相についても、他の複数の調査で同様の結果となっている⁽¹⁹⁾。よく会う友人なのだから、会ったときに話せばいい、というものではないらしい。前述(3-3)の束縛の度合いを調節し得る常時接続状態で、「今」聞いて欲しい、今の気持ちを分かち合いたいのだ。

表 【ケータイメール使用の理由】



対象：女子大学生 2002-2003

4-4 ケータイメールコミュニケーションの一側面

ケータイメールが支持される理由の一つは、その非対面性にある。対面コミュニケーションに付随する不安と緊張が格段に減少するからだ。それだけならPCメールも同じことなのだが、二つ目の理由が、まさに「携帯性」である。一人になった、ふとした時間に使えることが必要なのだ。「ちょっと聞いて欲しいこと」をメールすることは、その行為自体が一人でないこと = 誰かと繋がっていることの証となり、返事に限らず、「誰かのちょっと聞いて欲しいこと」を送ってもらえることで、より大きな安心感を得ることができるからだ。ケータイメール内容の第一の特徴はコンサマトリー性(自己充足性)だというのが⁽²⁰⁾、ケータイメールをやりとりする行為そのものが充足をもたらすのだ。

だからこそ、「すぐに返事しないとだめなんです」⁽²¹⁾ ということになる。これはメールの持つ非同期性と、ケータイの持つ即時性（「潜在的な同期性」⁽²²⁾ と言うべきか）という、一見相反する特徴双方の微妙な発現と見ることができる。すなわち、非同期的であること、即時的でないことを前提として「相手を煩わせない」 = 「自分の心理的負担が少ない」スタンスでコミュニケーションを開始するけれども、実は即時的な応答を期待している。すぐに反応があれば、それはまさに一人ではなかったことのこの上もない証として安心し、さらに自らの応答を積み重ねることができる。逆に、返事が遅れると「怒っているのではないか」「嫌われたのではないか」と心配することになる⁽²³⁾。「まだ読んでいない」「都合が悪い」だけなのかもしれない、とは分かっているにもかかわらず失望する。こうした行き違いを避けるためには、頻繁なチェックと応答は欠かせない。それは、よく会う友人との間の安心できるコミュニケーションルールとなっているのだ。

5. おわりに

「一人で居るときに、一人ではないと感じたい。」学生に対する聞き取りの中で出て来たことばである。それは、自信のなさ = 自らの存在に対する不安から

来るものであるようだ。若者として当然の不安だろうが、その中にはどのようにして他者と関係を結び、自分を理解してもらおうかという、コミュニケーションが関わる問題が含まれている。

その一つの答えが「自分の今をできるだけたくさん共有してもらおうこと」であった。どうしたら「一人でなくなる」ことができるのか、どうしたら「安心できるのか」という一つの方策をケータイは提供していると見ることができる。これはある意味では、説明することをせずに現象だけをどんどん提示して、「だから、何となく分かって！」という甘えた姿勢だと見ることできる。批判したいのではない。はじめに述べたように、若者のコミュニケーションにはその言語社会の大きな流れが、先鋭化して現れることがある。彼らの抱える不安と、それゆえに安心を求める動きは、程度の差はあっても今日の日本語社会全体の問題であるかもしれないのだ。

参 考 文 献

- 調査(1)：情報通信主要データ；総務省 2004.9.17, 総務省
調査(2)：社会生活基本調査；総務省 2001
調査(3)：第4回情報化社会と青少年に関する調査；内閣府 2001
調査(4)：コピキスタスネットワーク社会の国民生活に関する調査；総務省 2004.3
調査(5)：携帯電話・PHSの利用実態調査；東京大学社会情報研究所 2000
調査(6)：青少年と携帯電話等に関する調査；総務省 1999
三宅2000：ケータイと言語行動・非言語行動；三宅和子『日本語学』2000.10
三宅2001：ポケベルからケータイ・メールへ；三宅和子『日本語学』2001.9
田中2000：「ケータイ」という研究テーマ；田中ゆかり『日本語学』2000.10
田中2001：大学生の携帯メール・コミュニケーション；田中ゆかり『日本語学』2001.9
江端1999：あいさつ交換儀礼の研究；江端義夫『日本語学』1999.1
比嘉1985：あいさつとあいさつ言葉；比嘉正範『日本語学』1985.8
五十嵐2003：大学新入生の携帯メール利用が入学後の孤独感に与える影響；五十嵐祐他『心理学研究74-4』2003
飯田2002：新・接客表現 はことばの乱れか変化か；飯田朝子『言語』2002.8
中村2000：携帯電話を利用した若者の言語行動と仲間意識；中村功『日本語学』2000.10
中村2001：携帯電話と変容するネットワーク；中村功『情報行動の社会心理学 第8章』北大路書房 2001
橋元2001：携帯メールの利用実態と使われ方；橋元良明『日本語学』2001.9

記谷2003：大学生の携帯メールの利用態度に関する研究；記谷康之『広島修大論集44-1』
2003

太田2001：パソコン・メールとケータイ・メール；太田一郎『日本語学』2001.9

注

1. 調査(1)による。

モバイル利用者

H16. 8月末

	万 件	人口比%	世帯比%	前年比%
携帯電話契約数	8,347	65.5	169.4	106.7
第 3 世 代	2,165	17.0	43.9	204.5
P H S 契 約 数	491	3.9	10.0	91.4
携 帯 + P H S	8,838	69.4	179.4	105.7

2. 調査(4)では、既に全世代平均の使用率が80%を超えており、特に40歳未満では、使用率にほとんど差がない。

全 体	20未満	20～29	30～39	40～49	50～59	60～69
81.8%	95.8%	96.6%	96.3%	88.1%	67.5%	50.0%

3. 表以外の選択肢と12～30歳全体の回答%は下記の通り。

ほしい情報をすぐに手に入れられるから (17.4%)

一人でいるとき安全だから (16.8%)

使っているとさびしさがまぎれるから (6.1%)

知らない人との新しい出会いができるから (4.4%)

もっていないと友だちの仲間に入れないから (4.1%)

4. 三宅2000では大学2年生n = 51で「連絡を取る相手 = 友人」66%。

田中2000では大学生n = 178で通話・メールとも「送受信の相手上位」は友人が占める。調査(5)では10～20代において、「友人と」が他世代より格段に多く、「家族と」が他世代を下回る。

5. 2-1で述べた通り、ケータイが普及する直前、ポケベルを利用して同じ方向性と考えられるコミュニケーションが、主として女子高校生の間で成立していた。(三宅2001)

6. これは、3-3表 [友人]と同じ設問「人との結びつき」として調査されたものである。選択肢は下記の通り。複数回答。

今までの友だち関係をより強くするのに役立っている

しばられていると感ずることがある

友だちを身近に感ずることができる

家族が安心するようになった

新しく知り合った人と付き合いを長く続けることができるようになった

特にない

わからない

7. ケータイの伝達内容の調査では、相手が家族と特定できるのは「帰宅連絡」であり、

特に通話では、若年層の「よく話す内容」として挙がってくる。調査(3)で12～17歳の35.1%，調査(5)で学生/生徒の46.6%。

8. [江端1999：このごろは、村社会でも家族内での朝の出会いのあいさつが頻繁になされるようになったのは、何も共通語が普及したからではないのである。それは核家族化が進み、部屋の間仕切りが出来、プライバシーが保たれる工夫がなされたから、「出会い」ということが成立することになった。そこで、家族以外の他人に対してしか言わなかった「お早う」というあいさつを不自然と思いつつも使うようになったのである。]

[比嘉1985：日本人は社会的にも儀礼的にもなる必要のない相手に対してあいさつをしないということになる。(中略)日本人社会で社会的にも儀礼的にもなる必要がないと思われている相手は家族の構成員である。これまでの調査によると、家庭の中であいさつをとりかわす日本人は意外に少ないという結果がでている。]

9. 調査時期：1999年5月～9月

調査方法：アンケート。生徒はその場で回収，保護者は生徒を通じて記入依頼。48歳男女は手渡し後1ヶ月以内に回収。

回答数：福岡市内中学2年生 76人(回収率100%)
高校1・2年生 112人(100%)
上記保護者 92人(49%)
福岡市内48歳男女 54人(54%)

10. 調査時期：2003年6月

調査方法：アンケート。その場で回収。

対象者：福岡市内高校生 223人(100%)

小野の指導のもとで、檜崎知佳が調査した。

11. 「朝の挨拶をしない」割合が相対的に高いことについては、「自分の外出の挨拶をしない」割合が低いことからして、相手が居ないからというわけではないのだろう。これは、朝の銘々の忙しさ(夜型生活パターンの必然でもあるのだろう)の中で、伝統的な「親密＝しなくてよい」が比較的許される状況と感じられていれる結果だ、とも考えられる。

12. 特にケータイメールに関して、大学の新生がこれを活用することで新たな人間関係形成を促進し、孤独感の低減につながる事が指摘されている(五十嵐2003など)。

13. 例えば「お会計のほう?」「円からお預かりします」「よろしかったですか」のようなバイト敬語 新・接客表現(飯田2002)なども、この流れの一つである。

パブリックなコミュニケーションに欠かせない敬語(敬意表現)だが、伝統的な敬語体系が依ってきた社会構造や表現意識の変化が、単純に未熟 習熟へという学習で若者が伝統の中に入り込んでいくことを妨げているのだろう。これらの表現は「日本語の乱れか?」という問題は別にして、伝統的な敬語体系(古いマニュアル)に替わって、新しいマニュアルが試行されている姿だと考えられる。

14. [中村2001：携帯電話は日常的に会い、夜には固定電話でおしゃべりをするような親しい間柄で使われ、結果として四六時中べたべたとつながりあう関係を作り上げると

いう、上とは反対の議論があります。吉井ら(1999)は携帯電話が成立させるこうした関係を「フルタイム・インティメイト・コミュニティ」と名づけました。]

吉井ら(1999)とは、「携帯電話の普及とその社会的意味」(中島一朗他『情報通信学会誌59』1999)。

15. 調査(5)：通話相手数(全年齢層)

相手数	0	1	2 - 3	4 - 5	6 - 9	10 - 19	20 -
%	3.4	4.6	30.3	39.2	12.3	8.2	1.9

橋元2001：メール相手数(男女・年齢別)

全体	男性	女性	15 - 19	20 - 24	25 - 29	30 - 34	35 - 39
4.8	4.4	5.2	6.6	5.2	4.3	4.2	3.3

記谷2003：(大学生)メール相手5人まで 54.3%

16. 2001・2002年の2回にわたり、本学1・2年生を対象に調査を行ったもの。アンケートを配布、一週間後に回収。回答数293(77%)

ケータイメール使用者 n=293 PCメール n=78

2001年調査は、小野と早田茜が共同で行った。

17. 調査(5)のほか、中村2000、三宅2001、橋元2001、記谷2003など。

18. 太田2001では、1メール平均44文字というデータが報告されている。

19. ケータイメールの内容に関する他の報告。

三宅2001：1位「近況・日常」66%

2位「連絡・用件」42%

田中2001：1位「その場の出来事や気持ちの伝達」73.6%

2位「事務連絡」66.7%

3位「とくに要件のないおしゃべり」65.1%

中村2001：1位「待ち合わせなどの約束や連絡」65.2%

1位「その時あった出来事や気持ちの伝達」65.2%

3位「特に要件のないおしゃべり」56.5%

記谷2003：1位「待ち合わせの約束・連絡」50.0%

2位「できごとや気持ちの伝達」34.0%

20. [中村2000：ケータイメールの内容だが、その第一の特徴は、コンサマトリー性(自己充足性)である。音声に比べて、その時々々の出来事や感情を伝達すること自体が目的の内容が多くなっている。]

21. [記谷2003：学生の携帯電話がメールの到着を知らせた。今まで私と話をしていたその学生は会話をいきなり中断し、すぐに携帯電話を手にとり返事を打ちはじめた。私が「後で打ちなさい」と注意すると学生は「すぐに返事しないとだめなんです」と言って手を止めずそのまま返事を打ち続けたということがあった。]

22. [太田2001：相手がすぐにメールを受け取って返信してくれば、チャットに近い同期的やりとりも可能である。とすると、非同期的というよりむしろ、潜在的な同期性がある、という言い方もできるかもしれない。場合によっては非同期的なことがあっても、対面や電話による会話に近い性質を持つと言えるのではないだろうか。]

23. [中村2000：ケータイメールは従来の電子メールとは違い、送信されたメールが即時的に相手に届くと考えられている（略）しかしここに感情の行き違いが発生する余地がある。すなわち様々な理由（就寝や置き忘れなど）で返事が遅れると、それが内容に対する異議だととられかねないのである。この点について、ある学生は次のように言う「例えば夜の一時にメールが来たときに、こっちはもう眠っていて、それで朝起きて気づいて送ったら、昨日僕が怒ってたっていうイメージが相手に伝わってしまっ
て...」]